

## 64. 「福山義倉」の文化的ネットワークとその継承－菅茶山・井伏鱒二を軸に

福山大学 名誉教授 青木 美保

### 概要

本研究は、近世後期に福山藩内で地域の豪農商層が創始した、現存する全国で唯一の地域の互助システム「福山義倉」（1804～）を取り上げ、その地域的特性を成立時に遡って明らかにするとともに、その継承過程を解明し、埋もれた地域の歴史を現代に示すことを目的とする。そのため、未発掘の新資料の読解を踏まえ、「福山義倉」成立時の藩儒で漢詩人の菅茶山と福山市出身の近代作家井伏鱒二を軸として、両者の周辺の約260年間にわたる地域の文化の動向を、政治社会史、儒学受容史、教育史、文学史の観点から、それぞれ専門的に解明した。

その結果、福山義倉成立においては、①天明期の藩政の混乱収拾に庄屋たちが働いたこと、②それをきっかけに藩政に対して次第に庄屋の影響力が増して行ったことが明らかになった。この庄屋の積極的な行動の背景には、大坂懷徳堂を中心とする朱子学受容と漢文学受容があり、藩や身分を超えた人的交流が地域の課題解決を可能にしたことを指摘した。

一方、「福山義倉」を創設・運営した名望家たちの文学活動の一部として、漢詩文を媒介とする文化的ネットワークが備後・備中文化圏で機能し、後年の文化的ネットワークには井伏鱒二の父・郁太も参加していたことを具体的に示した。また、その高踏的性格を批判的に見たのが井伏鱒二であることを明らかにした。その上で、鱒二の兄・文夫も地域啓蒙誌を発刊して「福山義倉」の経世済民的な部分を文化活動・文学活動の領域で顕現させたという仮説の下に調査を継続している。福山藩を含む備後備中文化圏においては、複数のネットワークが存在・機能し、それらは時に交差して福山地域の思想的基盤を形成してきたと言え、「階級協調的」な庄屋たちの姿勢は、母から伝えられた地域の記憶と相俟って井伏文学の根底に坐るとの見解を得るに至った。

これらの研究成果を総合するため、シンポジウム（2024・11・30）を開催し、その成果は報告書（2025・3）にまとめ、全国の研究機関など130余か所に配布した。2026年度は研究メンバーに中国思想、日本近世史の研究者2名を加えて研究期間を1年延長、追加調査を加えた研究成果を普及書として出版することを計画している。また、報告書の概要は、「義倉220周年記念式典」（一般財団法人福山義倉主宰、2025・10、福山市内）において発表する機会を得た。

以上のように、本研究は、共時的、通時的な研究を、複数の研究者によって多角的に進める研究プロジェクトであり、それは研究助成金によって十分に遂行することができた。

### 背景および目的

「福山義倉」は、地域固有の互助システムとして社会学の専門書には取り上げられている（恩田守雄『互助社会論』2006）ものの、一般的には殆ど知られていない。だが、「福山義倉」は、飢饉や災害時の救恤活動のみならず、地域における文化振興活動をも含む、持続可能な地域社会のための総合的な活動をしており、それは全国でも「唯一無二」の存在とされる（『義倉二百年史 資料編1（近世）』2015、「解説と解題」P25）。このシステムの成立には、菅茶山が創設した廉塾（1791～1873）の教育活動から派生した人的ネットワークとその継承があったと言える（「菅波信道一代記」）が、その経済的仕組みについての研究はなされている（中山富弘「義倉の

救恤活動と米穀調達」2006、平下義記「「救法」の村請:備後国福山藩領の義倉運営」2018)ものの、その文化的背景についてはほとんど言及がない。「福府義倉」(設立時に菅茶山が命名した名称)設立の経緯は、発起人の河相周兵衛が書き残した「義倉発端手続」(1832、前掲『義倉二百年史』、P92)に詳細な説明があり、大阪懷徳堂の学主・中井竹山(1730~1804)の「社倉私議」(1774)を参考にしたことが述べられている。竹山は、寛政の改革の主導者、松平定信に献策したことで知られる朱子学者であり、すでに「福山義倉」との関係は示唆されていた(畑中誠治「福山藩の義倉について」1966)が、その経緯についての研究はなされていない。菅茶山の対社会意識についての言及も少ない。また、「福府義倉」の特徴は体制側と地域住民側の相互利益を制御する理念と仕組みにあるが、その社会観が、近代の作家井伏鱒二の昭和初期の作品における対社会意識にどのように影響したかは、近代文学史上重要な論点である。「福山義倉」が近代以降も救恤活動を継続しており、その活動が、プロレタリア文学運動に対する反措定となりえるからである。本研究においては、このような「福山義倉」の社会運営を支えてきた文化的背景を明らかにし、現代社会に提示することを目的とする。

## 方法

「福山義倉」成立の文化的ネットワークを明らかにするために、幕府の政策の動向、関西の社会・経済・文化の状況を押さえながら、それに伴う備後圏域の動向を調査することとした。特に、地域の動向については、地域資料に関するこれまでの研究成果を踏まえるとともに、未発掘資料の読解に取り組んだ。まず、「福府義倉」成立の経緯は、発起人・河相周兵衛(1764~1833、千田村庄屋)の手記「義倉発端手続」(『義倉二百年史 資料編1(近世)』、2015)に詳細な説明がある。そこで「福府義倉」考案の際の参考資料とされた中井竹山の「社倉私議」の解説については、中井竹山の研究者、清水光明(日本近世史)が担当した。それを河相らにもたらししたのは、神辺の庄屋で、菅茶山の最初の弟子とされる神辺料助(1767~1844、藤井暮庵)であり、備中岡田藩家老・浦池左五郎(1759~1836)から借用したとされている。その経緯に関する調査は、青木(日本近代文学)が担当した。藤井暮庵の生涯については、菅波哲郎「暮庵先生行状略記附録」(『広島県立歴史博物館 研究紀要』第17号、2015)の研究成果を踏まえた。また、備中岡田藩家老・浦池左五郎の事績、及び暮庵との交流については、『備中吉備郡史(下巻)』(1975、P2708)等を参照した。また、今回の調査において、「福府義倉」成立時の関係者と岡田藩関係者の交流の中に、菅茶山(1748~1827)と古川古松軒(1726~1807)との関係を示す未発掘資料の存在が確認された。古松軒は、実地踏査に基づく地誌編纂の実績を買われて松平定信に登用された異色のブレインの一人である。今回は、古松軒著『西遊雑記』(1783、岡山県立図書館所蔵)に付された菅茶山の序文、および、新資料、菅茶山の古松軒宛書簡(青木蔵、年代不詳、國學院大學講師・澤田章[1876~?]による書写資料)の翻字・解説を行った。

また、「義倉発端手続」には福山藩内における経緯が記されているが、河相が最初に計画への参画を呼び掛け、賛同を得たのは戸手の庄屋・信岡平六である。信岡の事績、及び当時の藩内の庄屋の活動実態については、山名洋通(郷土史家)による「信岡家文書」の調査を参照した。また、福府義倉の活動実態については、平下義記(日本経済社会学、日本地域史)の調査を踏まえた。

第二に、文化史的な背景については、先ず菅茶山の対社会意識について、清水洋子(中国思想)が『黄葉夕陽村舎文』(広島県立歴史博物館所蔵)収録の「浩気説」を取り上げて翻字・読解を行い(「菅茶山の浩気説について」2021)、その福祉思想について考察した。また、近世後期備後地方における儒学教育の実態について、市瀬信子(中国文学)が、新資料「備前邑久岩佐家旧蔵書」(青木寄託、竹村信治・武久康高作成の「同」広島大学国語文化教育学講座「岩佐文庫」目録2002、がある)から、「孔子家語」の書入注と廉塾蔵書中の同書書入注との比較研究を行い、その学びの現場について考察した。当該資料は、福山藩儒、門田朴斎・杉東父子の蔵書を多く含む貴重資料で、近世後期に福山藩内で所蔵されていたものが備前の岩佐家に移されて保存されていたもので、未発表の新資料である。また、近世後期の西国における庶民の儒学受容の実態について、柳川真由美(日本近世地域史)が備前・和気町の豪農・大國家(菅波家と縁戚に当たる)に伝わる「大國家文書」から、当主の救恤活動の善行表彰を子孫に伝えるため絵画化された事例について報告した。

これらの文化的ネットワークは、寛政異学の禁に連動する朱子学派を中心とするが、その中核的存在である、大坂懷徳堂の学主・中井竹山の経世論について、湯浅邦弘（中国思想）が大坂懷徳堂の教育、および朱子学正学派の学問的特徴を報告し、「福山義倉」の思想的背景として研究グループで共有した。

近世近代移行期の知識人の動向については、前田貞昭（日本近代文学）が、井伏鱒二の父・郁太が毎号詩を投稿した月刊漢詩専門誌『詩』（ふくやま文学館所蔵、1894年1月～1896年1月、回天詩閣・広島県深津郡福山町字大黒町発行）、および井伏の兄・文夫が発行した雑誌『郷土』（ふくやま文学館、金光図書館蔵、1923年1月～1927年5月）を調査し、井伏鱒二「田園記」についても新たな分析を加えた。

井伏鱒二については、青木が昭和初期の郷土を舞台とした作品における近世後期の話題を取り上げ、井伏の文学的姿勢への郷里の農村における社会対応からの影響を検証した。

以上のように、「福山義倉」成立の文化的ネットワークについて、多角的な観点から調査するとともに、これらの研究成果総合のために、シンポジウム（2024年11月30日、福山市内）を開催、その成果を踏まえて報告書（2025年3月発行）を作成した。

## 結果および考察

「福府義倉」の運営方法については、「義倉文書」における「義倉目論見」・「救法目論見」（『義倉二百年史 資料編1（近世）』）に詳しい。その仕組みは、発起人・河相周兵衛が「諸国無類の義倉」としており、創立者自身がその独自性に矜持を持っていた。「福府義倉」の特徴は、第一に出資は豪農商層と藩に限定されていた事、第二に基金は藩内の全階級で利用可能であった事、第三に救荒のみでなく、文化振興にも支出した事、第四に自由自在な貨幣運用にあった事の四点である。

「福府義倉」成立の社会的背景には、藩主の幕政への登用に伴う藩内の支配・被支配の関係悪化という、福山藩の特殊事情がある。天明の飢饉の際、農民の不満は藩への「強訴」（天明の一揆、天明6・1786）となって表れたが、その中で庄屋は問題を共有していたと推測される。そこに「義倉」創設の動機があったことは、「義倉発端手続」（前掲書）から推測される。その解決策は、「義倉目論見」に示されているように、まず大坂商人の支援を仰ぎ、自分たちも出資して藩の借財を肩代わりし、下賜された利息を積み立てて活動の基金とするという方法であった。今回の調査によって明らかになったのは、それが実現できた背景に、菅茶山を中心とする朱子学派のネットワークがあったことである。

本研究で取り上げた近世後期の人物たちに共通するのは、読書を通じた学問と社会的実践活動の両立である。「義倉発端手続」において河相周兵衛は、信岡平六を始め、庄屋、商人たちが次々に計画に賛同したことを述べているが、その背景には行動理念の共有があったことが推測される。その計画は、茶山の最初の弟子とされる神辺料助（藤井暮庵）が中井竹山の「社倉私議」を岡田藩家老・浦池左五郎から借用したことから始まっている。暮庵は、天明の一揆（1786）の際の「出精」の働きを藩から評価され、度々褒賞金を下賜されるとともに他の庄屋を兼帯し、後には名字帯刀を許された（「暮庵先生行状略記附録」）。また、河相周兵衛とは藩の事業として「普請掛」などを命じられ、共に重責を勤めている（前掲資料）。寛政2・1790年5月には茶山とともに岡田藩を訪れ、同年11月に古川古松軒の媒酌によって岡田藩士の女と結婚している（新資料・茶山の古松軒宛書簡はこの婚礼に関するものと推定）。名臣として知られた浦池左五郎とは親交が長く続き、収書家でもあった浦池から竹山の「草茅危言」を借用したことが分かっている（『吉備郡史 下巻』）。暮庵は茶山を通じて西山拙斎の教えも受けており、また、懷徳堂で竹山にも面会している（前掲資料）。ここには、備中・備後の朱子学派の文化的ネットワークが息づいており、それを基盤とした庄屋の社会的な地位の向上と躍進が見られる。その一派は、寛政異学の禁を主導した人々でもある。ただ、暮庵は、文化14・1817年借財が高み破産、「役義御免」となって京都に移住している。地位向上にリスクも伴っていたことが推測されるが、それは義倉への藩からの利息支払いが完了する（文政2・1819年）以前のことであり、「義倉」の仕組みが、庄屋のリスク回避の方策にもなっていたことが推測される。庄屋の普段の生活ぶりについては、山名洋通が「信岡家文書」から、地方三役の中心として村と藩の間をつなぎ、藩の意向を伝達する責任を負っており、激務であったことを報告している。暮庵の例は、学問によってそこから出て行くことも厳しいことを示している。その中で、庄屋の跡継ぎがその勤めに誇りを持つように幕府も藩も個人も、善行の表彰をするなどの工夫を行った。柳川真由美は、大國家で救恤により表彰さ

れた当主の肖像画を絵師に依頼して子孫に残すという事例を紹介しているが、そこには、体制維持のために教えのイメージ化戦略があったことを推測させる。

寛政異学の禁以後、教材の出版が全国で行われ、教育環境が整備された。市瀬信子は、福山藩内に所蔵されていた新資料「孔子家語」における書入注について考証し、その注が何らかの原本からの写しであり、元の注の作者は知識人で、この書入れ注の背後に「知識人から」「知識の伝達」を受ける初学者の学びの現場を推定した。

これらのネットワークの結節点となっているのが、神辺という西国街道の宿場町であることも見えて来た。「義倉」の仕組みの参考として、秋月藩（福岡藩の支藩、現福岡県朝倉市秋月）の藩士を通して、藩儒・古文辞学派の亀井南冥の意見を求め、それによって図書購入費など文化振興のための支出計画が盛り込まれた。宿場町における人的交流、物流、貨幣による商取引など、多彩な社会活動の展開が、「義倉」設立の背景にあったと言える。ちなみに、山名によれば、戸手では寺子屋ができたのは天保以後のこととされており、福山藩内の文化環境も地域格差があったことを推測させる。神辺は文化の先進地区と言える。

今回の調査で、「福府義倉」成立の文化的ネットワークにおいては、社会的実践活動の前提として現実認識を徹底化する方向が見られた。第一に、菅茶山の「浩気説」を取り上げた清水洋子の論文においては、茶山が「癩癪病」を取り上げて論じる中で、「非常に身近な日常の場面や人々の様子を取り上げつつ論じている」と指摘しているが、それは現代にも通じる病的な精神状態の原因が家庭内の人間関係の構造にあるといった社会構造の指摘に繋がっている。また、茶山は古川古松軒『西遊雑記』序文において、古松軒の实地踏査の意義について「之れを読む者、藩政の土俗を覩て、即ち救荒聴獄に得ること有り」と述べており、藩政の問題解決のために、諸国の実態を観察することが重要だと述べている。ここには、朱子学の認識のあり方を見ることができる。

近世近代移行期の知識人として井伏鱒二の父郁太を取り上げた前田貞昭は、漢文学が衰退の一途をたどる中で、漢詩の創作から農業の改良へと意識を向けていく郁太の実態を指摘し、その上で、井伏鱒二が郁太詩の高踏的性格を批判的に見ていたことを明らかにした。また、青木は、大正昭和期の井伏鱒二の小説を取り上げて、郷里の農村を始め、災害や人災によって生活の場を失われた人々の対応の現場を、郷里を始め歴史の中に探して実録や聞き書きなどを踏まえて、そこに創作の原点を据えていく井伏鱒二の現実への姿勢を指摘した。

## 展望と課題

本研究の成果として、「福山義倉」成立の文化的ネットワークにおいて、朱子学派の儒学者が中心にあったことが見えて来た。その特徴は、社会における人間関係の安定化とそれを実現するための、現実観察に基づいた社会的実践活動にあることが判明した。それは、現代にも通じる持続可能な社会運営の有効な方針と言える。これについては、現代への提言として、研究成果を広く知らせるための普及書の出版を計画している。

また、研究上の課題として残るのは、第一に、文学者における対社会意識の問題である。菅茶山の漢詩人としての活動が対社会の活動にどう絡んでいたのかということである。これについては、本研究プロジェクトの成果の先で、それぞれの文学者に対する追及の深度を深め、その意識について考察することになろう。それは、近世近代移行期の井伏郁太、近代の井伏鱒二の文学活動に繋がる問題であり、個人と社会の関係という点で時代を超える普遍的な問題である。

第二には、「福山義倉」における金融に関する進んだ考え方についてで、金は手許に貯蓄せず、運用させるという考え方である。近世後期の幕藩体制における金融の活動実態を踏まえて、他地域との違い、「福山義倉」における金融の方策の形成過程を明らかにし、近代以降の資本主義社会における経済観念との違いを考察することは、持続可能な社会運営を考える上で現代にも重要な視点を提供すると言える。

(完)

## 研究報告

- 1) シンポジウム「『福山義倉』の文化的ネットワークとその継承—菅茶山・井伏鱒二を軸に—」、2024年11月30日、学校法人福山大学社会連携推進センター 9F プレゼンテーションルーム

- 2) 展示「『福山義倉』と儒教教育―『備前邑久岩佐家旧蔵書』から」、2024 年 11 月 29 日・30 日、学校法人福山大学社会連携推進センター 802 号室
- 3) 研究報告書『『福山義倉』の文化的ネットワークとその継承―菅茶山・井伏鱒二を軸に一』、青木美保編・発行、2025 年 3 月 20 日

#### 発表論文、引用文献等

- 1) 青木（秋枝）美保「井伏鱒二『鐘』にまつわる作品とその掲載誌についての一考察」、『福山大学人間文化学部紀要』25 巻、2025 年
- 2) 前田貞昭「明治 20 年代地方漢詩誌の活動について―一回天詩閣『詩』、そして、井伏素老―」、『言語表現研究』41 号、2025 年
- 3) 清水洋子「菅茶山の浩気説について」、『福山大学人間文化学部紀要』21 巻、2021 年
- 4) 清水光明『近世日本の政治改革と知識人：中井竹山と『草茅危言』』、東京大学出版会、2020 年
- 5) 平下義記「『救法』の村請：備後福山藩領の義倉運営」、『農業史研究』52 号、2018 年
- 6) 『義倉二百年史 資料編 1（近世）』、一般財団法人義倉発行、2015 年
- 7) 菅波哲郎「暮庵先生行状略記附録」、『広島県立歴史博物館紀要』第 17 号、2015 年
- 8) 恩田守雄『互助社会論：ユイ、モヤイ、テツダイの民俗社会学』、世界思想社、2006 年